

# 今日に息づく書のすがた ～書の伝統と文化～

高橋利郎（大東文化大学）

# 日常生活の中に（言語文化・生活文化の視点）

- **言語文化の底流として**— 言外の意思の表出
- **時代の節目、人生の節目、季節の節目の書**  
元号／命名書・祝儀袋・不祝儀袋・婚姻や葬送の書  
／書き初め・七夕・各種ののし などなど...
- **日本文化・中国文化の象徴としての書**  
各種のパッケージ／商標／看板表示／武道や伝統芸能との相性
- **信用と書**  
紙幣／各種の証書／企業名 など...

→ 書の古典は日常的な書字の基盤として存在する

→ 生活や社会との関わりから文化的な価値や意味を理解

# 書の伝統と美の価値（芸術文化の視点）

- **王羲之書法の受容**—日本の書における価値観の起点
  - **日本における書の伝統・価値観を形づくる画期**
    - ①王羲之書法の受容 ②書の日本化 ③仮名の創出 ④宋の書と墨跡
    - ⑤桃山江戸初期の書 ⑥唐様の時代 ⑦開国と清朝書法
    - ⑧戦後の大規模展覧会
  - **変わらない書の伝統と美の価値**—書の古典の存在
  - **変わっていく書の伝統と美の価値**—新たな書の古典の創出、書の古典の再評価／新出土の書／近世の墨跡／伝西行の古筆など
- 書の伝統と美の理解から、書の古典の生活への活用、今日の芸術としての昇華へ
- 表現と鑑賞の一体的な充実、多様で分析的な鑑賞活動の充実、生徒個々にとっての価値意識の形成、新たな価値の創出

# まとめ

表現に加えて執筆者や書写内容の優れた書は、評価の積み重ねによって古典化する。なかでも王羲之の書や初唐の楷書などは規範性を帯びて、書の基礎学習材として普遍的な意味を持ち、時代を超えて日常的な書字および芸術活動の基盤となり、書の伝統を形づくってきた。また、書の古典の臨書（表現）による、身体性や感覚を伴う「動き」や「感触」などの修得（習得）は、書を鑑賞するための大切な要素である。

さらに時代や環境、目的などに応じて、新たな書が古典化されたり、再評価されたりする。これを背景に新たな表現や美が生み出され、書の文化として社会で共有され、我々の生活を支え豊かにしてきた。戦後日本の書もまた、それまでにない新たな領域を切り拓き、新たな芸術文化として広く社会で共有されている。

書及びその美の価値は、時代や環境、鑑賞する者、鑑賞の観点等によって多様である。書の伝統と文化を踏まえながら、自らの価値意識をもって表現や鑑賞の活動に取り組み、書のみならず幅広い芸術とそこにある美に対して、自分にとっての意味や価値を見いだしていくことが、書ならびに芸術を学ぶ意義であると考える。

書の伝統と文化を踏まえ、日常的な書字活動、学校教育における書の古典の学び、学校教育及び社会生活の中での創造的な表現活動や多様で分析的な鑑賞活動に、自ら価値意識を形成しながら臨み、新たな価値を創出することこそが、書の伝統を継承し、書の文化を未来につなぎ、文化財としての書の意味や価値を尊重する姿勢を育むと考える。